様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：７２６８１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８４７３

研究課題名（和文）スリランカにおける宗教間の共助思想構造に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on religious symbiosis structure in Sri Lanka.

研究代表者
釈　悟震（Shaku, Goshin）

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・副総括研究員

研究者番号：８０２７０５３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：今の地球上は大変困難な時といえるGLOBALIZATION時代から自国優先的な民族主義や片側原理主義の思想の傾向が深化している。世界は緊張や紛争の多くが宗教の名の基で展開している気配で遺憾の極みである。これらの現実的な問題意識を第一義とした本研究は今日的な緊張と紛争を超克するためにスリランカの古からの寛容と共生思想に基づいて近未来的にみなが尊ぶ平和思想の新しい枠組みや解決策を構築する。その方法として宗教思想の可能性に新たな光を投じようとしたスリランカにウエイトをおき挑戦的に仏教、キリスト教、イスラームの現地調査を中心とし、宗教間の共助思想構造に関する基礎的研究課題解明の一端を別巻にて公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果の一端は“Seeking Symbiosis of Humanity”という英文の書物および『人類の共生と平和の尊びを求めて―寛容に生きるスリランカ宗教の超克思想を考える』という一般啓蒙書の形で公刊しスリランカ社会が築き上げてきた平和的共存思想を世界および国内にむけて発信した。これは、スリランカ社会における精神伝統の再評価の提示という学術的意義および、スリランカのみならずグローバル社会において思想的、宗教的、経済的において全地球的不平等に加え未曽有のCOVID-19の発生に伴い、より一層難局面に接している人類の精神的かつ心理的平安と安穏の為、大いなる社会的意義があるものと確信する。

研究成果の概要（英文）：Currently, the wave of globalization-one of the most difficult time throughout the world, has developed an ideological tendency towards Neo-Nationalism and/or religious fundamentalism for each country’s own interests. Many of the serious tensions and conflicts in the world are occurring under the name of religions, which are truly regrettable. Those realistic issues being regarded as a primary concern, this research shows a new framework and solution to achieve the worldwide peace idea in the near future on the basis of the ancient Sri Lankan ideas of generosity and symbiosis, which will overcome today’s serious tension and conflict issues. As a method for the research, one focused on Sri Lanka at first, who tried to shed a new light on the possibility of reconciliation among the religious thoughts. Through the fieldwork on Sri Lanka, one tried to clarify the basic research issues in order to investigate the collaboration structure among the Buddhism,Christianity,and Islam.

研究分野：インド仏教・アジア宗教思想

キーワード：宗教間異質の超克　人類の共生と平和の尊び　人類不戦の尊び　民族の価値観そして宗教と民主主義　宗教と自由　慈悲と愛と寛容そして共生　宗教と共存共栄　宗教における生と死と心の安穏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本プロジェクト研究代表者釈悟震は、上座部仏教を専門領域として、長くスリランカ仏教の研究に携わって来た。その過程で、仏教伝統に育まれたスリランカ社会特有の共助的な文化的伝統に関しても、強い関心を持つに至った。特にスリランカは慈悲と寛容の国と古くから呼ばれて来たにも拘わらず、1983 年より 26 年間にわたり繰り広げられたタミル人ゲリラとの熾烈を極めた内戦等によって、その寛容精神はすっかり影を潜め、全土的に精神的な閉塞感、宗教的な不寛容が顕著となったことに危惧を覚えていた。しかし、その内乱も終結し、スリランカ社会にも、伝統文化の再評価が生まれている。特に、スリランカにおいては、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラームとの間に、激しい宗教対立・紛争が起きなかったという世界的に見ても稀有な伝統がある。

本研究プロジェクトの目標は、このスリランカにおける宗教の平和的な共生思想の形成や歴史を明らかにするのみならず、その文化の再評価を通じて、スリランカ社会が築き上げてきた宗教融和・共存共栄の思想・文化の現代的な意義を世界に発信することである。

２．研究の目的

本研究企画の目的は、スリランカ社会が、長きに亘り形成してきた寛容精神の現代的な意義を再発見し、再評価することにある。しかし、この寛容精神に支えられた社会伝統は、近代の植民地支配や、タミルゲリラとの激しい戦闘により、久しくスリランカ社会から影を潜めた感が否めなかったが、2009 年の内戦の終結以後、徐々に寛容的共生の精神は、スリランカにおいて高まりを見せつつあるように思われる。本研究において、このようなスリランカの精神文化伝統の再発見、再評価を提示することによって、その精神伝統の復興を支援するという副次的な効果も念頭にある。特に、研究代表者釈悟震が長年研究してきた「パーナドゥラ論争」は、スリランカにおいてすら忘れられかけていたものであるが、釈の研究の働きかけで現地の研究者もその価値に気づき、再評価するに至ったという経緯がある。

同様に、スリランカにおいては早くも 7 世紀末には、イスラームのコロニーが確認され、以来イスラームは、スリランカ社会において、仏教、キリスト教との平和的な共存の伝統を維持してきた。この間、イスラームは、他地域に見られるような武力や移民政策などによるイスラーム支配の確立－それは同時に他宗教の弾圧であり、消滅にもつながる事であるが－といった事実が全くなかった。スリランカ社会のイスラームは、イスラームの中でも特異な存在である。この事実は、イスラームが伝播した東南アジアや中央アジア、更にはインド亜大陸においても見出せない。

なぜスリランカのイスラームのみが、他の地域とは異なり、イスラーム絶対支配社会に至らなかったのか？また一般にイスラームにおいて、仏教徒はカーフィル（多神教徒）として忌避され、時にはそれ故に排除の対象にさえなるにもかかわらず、スリランカではイスラームは、仏教と平和的共存、共助の関係を作り、他地域でみられるような宗教対立や紛争の事例は、殆ど見られないのか？連携および研究協力者は、この点に注目し、スリランカでは、なぜイスラームは平和共存社会構築へと進み得たのか、そこには何かそれを可能にする宗教思想としてのイノベーションがあったのかを究明する。

この点を明らかにすることで、イスラーム教における異宗教、特にイスラームが忌避する多神教徒との平和共存の可能性を、イスラーム側からも積極的に切り拓く内在的根拠の所在を明るみに出すことにつながるはずである。この事実を解明することは、単にスリランカにおける宗教史上の問題にとどまらず、21 世紀においてイスラームとの平和的な共存関係の構築が、国際社会の緊急課題となっている今日において、きわめて甚大な意義を持つと信ずる。

さらには、イスラームとの共生関係構築が求められつつある東アジア諸国にとって、有益な先行事例であり、スリランカ・イスラームの検討は、特に日本のように典型的な多神教社会であり、イスラームとの文化的、歴史的関係をほとんど持たないイスラーム初心者社会においては、その平和的共生関係の構築に大いに参考となる事例である。かくして、スリランカ・イスラームの研究は、日本の未来社会構築にも大いなる意義を持つことになる。

さらに、太平洋戦争の記憶が薄れつつある昨今の日本において、戦争の惨状、平和社会の重要性、またその維持の大切さなどを改めて再確認する必要が急速に高まっているが、その点をジャヤワルデネ第二代スリランカ大統領の存在を再確認、再評価することで、改めて平和社会の意義を考える契機となる研究成果を得ることを目指した。

３．研究の方法

研究代表者釈悟震は、「パーナドゥラ論争」に代表される仏教とキリスト教の宗教対話の全貌を明らかにするために、現地調査や資料収集をスリランカの名門ペラデニヤ大学(University of Peradeniya)やルフナ大学(University of Ruhuna)の協力を得て実施する。特に、ペラデニヤ大学のパーリ仏教学部からは、ニャーナナンダ(Muwaetagama Gnanananda)教授以下、全面的な支援を取り付けており、夏季と冬季の二回同大学の講師陣の協力の下に、パンチャ・マハヴァダヤ(Pannca Mahavadaya：五大論争)と呼ばれるバッデガマ(Baddegama)、ワラゴーダ(Waragoda)ウダンヴィタ(Udanvita)ガンポラ(Gampola)パーナドゥラ(Panadhura)の各論争について詳な資料を収集する。これらの論争は、「パーナドゥラ論争」以外は、スリランカでも殆ど知られることがなく、その資料収集は現地人スタッフの協力を仰ぎつつ行い研究課題解明に尽力し、これら歴史

に埋もれた事実の発掘を中心に長期に及ぶ現地調査を行う。具体的にはスリランカの国立公文書館やペラデニヤ大学・ケラニア大学・コロンボ大学・ルフナ大学が所蔵する資料やそれぞれの開催地における現地での聞き取り調査を行う。
一方、スリランカ人口の 9 パーセントを占めるスリランカ・イスラームと他宗教の関係を担当する連携および研究協力者は、コロンボのイスラーム教コミュニティー、特にコロンボ最大級のモスクであり、古い歴史を誇るマラダナ・モスクのイマーム、並びにそのマドラッセ、カレッジ長のムハンマド師の支援を得て、コロンボのムスリムの歴史や現状について、フィールドワークを行う。また、仏教の聖地キャンディの仏歯寺周辺のムスリムの現地調査を行う。同地域は、イスラーム教徒が寺院の境内において商売し、また寺の運営に積極的に関与するという特異なイスラーム社会を形成しており、この点は先のプロジェクトにおいて釈と共にネットワークを構築したスリランカの名門大学ペラデニヤ大学のパーリ仏教学部ニャーナナンダ教授をはじめ政治学部のスタッフとの連携を活用し引き続き検討する。また、引き続き連携および研究助力ゴールのイスラーム教学校（ゴール・マドラッサ）の学長アミール師などの協力を得て、上述の三地域に滞在して現地調査を行う。
研究代表者はシンハラ語の解読に時間を要するゆえ、英語および現地の協力者の協力を介することになるが、インドにおけるイスラーム研究の経験と、先のプロジェクトの経験を生かして、29 年度はコロンボ・キャンディ・ゴール地域のイスラームに関する基礎データを収集する。更にジャヤワルデネに関する研究では、シュリジャヤワルデネ大学副学長の S. Amaratunga 博士の協力を得て主に、彼の宗教的寛容思想の形成過程を確認する。
【平成 29 年以降】
研究代表者釈悟震は、引き続き研究総括と共にスリランカにおける前世紀において激しくぶつかりあったパーナドゥラ(Panadhura)論争を始め、五大論争地の調査研究や今まで学会において全く知られていなかった首都コロンボ地域においての論争に関して今一度調査を行い、埋もれている資料発掘に力を尽くす。
その際、前述の大学のスタッフの協力を求めて、コロンボ大学や国立公文書館やマスコミ各社などが所蔵する資料の閲覧や調査、さらには資料収集を行う。さらにその論争が起因となり世界的な仏教復興運動（ベンバツ仏教教会設立や、パーリ仏教協会の創設など)、サルボダヤ協会へと連なっていった思想的な背景や運動の経緯を解明に努める。
仏教徒中心のシンハラ人と、少数派でヒンズー教徒中心のタミル人の間に深刻な亀裂を生んでいる現在、スリランカ人による宗教対立を超えた平和社会の構築という社会的・政治的重要課題に対して、その解決策をスリランカの歴史の中から見出すための基礎資料の提示となるように本研究成果をスリランカ人に向けて英語で、発信するための努力を行う。そのためのシンポジューム等を前述の大学スタッフの協力を得て開催する。
研究代表者は引き続きスリランカのイスラーム社会の歴史や文化を、現地調査を交えて調査研究するとともに、仏教とイスラームとの歴史的な交流についても検討する。また、キャンディ地域のムスリムと仏教徒との共存関係を調査し、その現状や問題点についても、仏教徒ムスリムの双方から聞き取り調査する。また、スリランカ・イスラームの権威 L.デヴァラジャ博士はじめ関連の研究者との密接な研究ネットワークの構築に努める。

４．研究成果
(1)研究代表者釈悟震は、19 世紀後半イギリス統治下のスリランカにおいて実際に展開された、仏教とキリスト教の一連の対論「パーナドゥラ（Panadhura）論争」を研究してきた。この論争は、今日の如く宗教間の平和的共存や諸宗教の互恵的な共存（共生）のための相互理解に積極的な意味を見出そうとする時代状況とは異なり、諸異宗教間の対決や対立が世界各地で繰り広げられていた時代に、仏教とキリスト教という二つの宗教を代表する知識人が、いわばおのおのの宗教の威信を賭けて、公開の場で勝敗を競った宗教対論であった。釈は、このような論争が、平和裏に行われたスリランカの宗教状況や、その伝統に関して、長年研究してきたが、現地の諸般の事情もあったために、資料の掘り起こしや現地人研究者の啓蒙というまさに基礎的な段階から始められねばならないものであった。
しかしながら、幸い、「スリランカにおける宗教対話の基礎的研究」挑戦的萌芽研究【課題番号】:23652010(研究代表者:釈悟震)【研究期間】: 2011-2013 年度助成費により、”THE GREAT DEBATE OF URUGODAWATTA”(Udaya Graphics (Pvt)Ltd Sri Lanka 2012)(ISBN: 978-955-54713-0-5)を公表する等、この方面の研究はかなり進めることができたが、しかし、未だに、基礎的な研究レヴェルの段階である。
また、この論争が、当時のアジア諸国の仏教復興運動に与えた影響に関しても、研究がなされなければならない。例えば、明治期における神智協会(The Theosophy Society)の創設者 ヘンリ・スティール・オルコット(Henry Steele Olcotte)は、この論争による仏教側の高邁な態度に感動し、仏教復興のために活躍した。その活動は日本にも及び、東京帝国大学で最初に仏教を講じた原坦山は、彼に強い影響を受けていたのである。廃仏稀釈で打ちひしがれた日本の仏教の復興に、オールコック大佐の存在が果たした役割は小さくないが、彼の活動の原点がパーナドゥラ（Panadhura）論争」にあったことは知られていない。この点一つをとっても、本研究プロジェクトの意義は大きい。
①一方において研究協力者と共に担当するスリランカ・イスラームの共生思想の研究も、スリラ

ンカにおいてさえ、ほとんどなされていなかったし、先に現地調査を行った時には、同国経済的首都であるコロンボ中心部に位置するマラダナ・モスクのイスラームが「仏教徒の研究者が、当モスクを訊ねてきたのは、150 年来初めてである」と研究代表者のインタヴューに応えたのが印象的であった。つまり、スリランカでは仏教とイスラームの関係は、平和的な共助関係にあるが、その研究となるとほとんどなされていないのである。この融和文化の意義についても、彼らはほとんど意識していない。この伝統の重要性をスリランカの人々が自覚する一助になる成果を出したことも挑戦的研究として意義がある。
また、日本の戦後復興に大きな貢献をしたスリランカ国第二代目のジャヤワルデネ大統領に関しても、その存在はほとんど忘れ去られていた。かつては、ジャヤワルデネ大統領への感謝の気持ちは、日本でも教諭されていた。その点でインド思想研究の碩学中村元博士の功績は大きい。がしかし、その研究は、余り注目されなかった。本研究代表者はこのような思想を中村元博士の指導に基づいて継承し、『中外日報』1998 年 2 月 10、12、14 日などにて不特定多数の人々を対象に集中的かつ啓蒙的に研究成果を発表しているが、さらに今回の研究で、その成果を一般向け書物の形で公刊できたことは、日本社会にこのような交流の事実を伝える上で、研究の萌芽を開く意義がある。
②以上のように、スリランカの宗教事情の研究は、立ち遅れている地域研究の文化、宗教研究として意義が認められるものである。また、その研究が釈悟震とその研究協力者によって開拓されつつある、という意味で、萌芽研究としての意義があると同時に、それ以上に重要な点は、スリランカに於いて培われ、育まれて来た宗教共存、寛容の思想は、単にスリランカのみならず、世界的な宗教共存社会の構築において有効な先例となるという視点に提示されたことが、まさに萌芽研究としての意義であり、本研究の独創性である。
(2)以上の経緯をふまえて今回の研究では、現代社会における宗教問題に貢献すべく、不断なくスリランカのキリスト教と仏教間に関する現地調査を資料収集および整理を行い、国内外の学会や招待講演において講演を行うほか、和文・英文の研究論文および啓蒙書を公刊、さらにマスメディアへの発表を行い、スリランカ諸宗教共存の思想やその現実展開の意味を広く世界に発信するよう努めた。
また、研究協力者とともに、コロンボ、キャンディを中心にムスリムと仏教徒との共存の在り方について、現地調査などから資料を収集し、これを検討し論文や啓蒙書等の形で発表した。
一方、ジャヤワルデネ研究は、ジャヤワルデネ記念館の協力を得て、その資料の分析も行い、彼の寛容思想形成について検討し、その成果を論文や啓蒙書などの形で発表した。
以上の研究プロジェクトの最終成果は“Seeking Symbiosis of Humanity”(ISBN: 978-955-96115-7-8)という英文の書物および、『人類の共生と平和の尊びを求めて―寛容に生きるスリランカ宗教の超克思想を考える―』(ISBN: 978-4-938859-34-3)という、専門家だけではなく、不特定多数の人々を対象とした一般啓蒙書の形で公刊することで、スリランカ社会が築き上げてきた平和的共存思想を世界および国内にむけて発信した。これは、スリランカ社会における精神伝統の再評価の提示という学際的意義および、スリランカのみならずグローバル社会において、思想的、宗教的、経済的において全地球的不平等に加え未曽有の COVID-19 の発生に伴い、より一層堪え難い局面に接している人類の、精神的かつ心理的平安と安穏のため、大いなる社会的および人文科学的に意義があるものと確信する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Goshin Shaku	４．巻 1
２．論文標題 The "Onshin-byodo" way of thinking and democracy	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Symposium Report Shared Values and Democracy in Asia	６．最初と最後の頁 45-47, 91-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 釈悟震	４．巻 34
２．論文標題 日本の伝統と価値観による民主主義	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東方	６．最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Goshin, Shaku	４．巻 1
２．論文標題 Inverstigating a new interreligious dialogue model for the golobalized world	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Abstracts Received for Asian Philosophy Conference 2018	６．最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 釈悟震	４．巻 令和元年度号
２．論文標題 「業と宿業」をのりこえられる叡智を求めて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 史跡足利学校令和元年度アカデミー(足利市)	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 釈悟震
２．発表標題 「怨親平等」の思惟方法と民主主義
３．学会等名 第4回アジアの価値観と民主主義シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Goshin, Shaku
２．発表標題 Reinvestigating the“Sri Lankan dialogues”in the Context of a Contemporary Interreligious Dialogue
３．学会等名 Asian Philosophy Conference and Indian Philosophical Congress 2018（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Shaku Goshin	４．発行年 2019年
２．出版社 Gatambe Junetion Kandy, Sri Lanka (Pvt)Ltd	５．総ページ数 136
３．書名 Seeking Symbiosis of Humanity	

１．著者名 釈悟震	４．発行年 2020年
２．出版社 白峰社(東京)	５．総ページ数 300
３．書名 人類の共生と平和の尊びを求めて--寛容に生きるスリランカ宗教の超克思想を考える--	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考